Osaka University Knowledge Archive

Title	戦国楚の歴史学 : 清華簡『良臣』を手掛りとして
Author(s)	黒田, 秀教
Citation	中国研究集刊. 2014, 59, p. 63-85
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58696
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

中国研究集刊　珠号（総五十九号）平成二十六年十二月　六三―八四頁

戦国楚の歴史学

―清華簡『良臣』を手掛りとして―

黒田秀教

はじめに

諸子百家に代表される戦国人士の言論には、随所に歴史的故事が織り込まれている。これは、戦国時代において既に、過去の歴史を自説の立脚点や根拠として利用していたということである。即ち、そうした利用ができる程度には、歴史資料の整理が行われ、史伝の類が流通していたことを示している。事実、戦国時代の竹簡群が近年陸続と出土しているが、これらの新出土資料には史伝の類が豊富に含まれており、当時の知識人が見聞していた資料を、現代の我々もまた目にすることが可能となった。戦国時代における言論の前提となっていた歴史認識についても新たな知見がもたらされたのである。特に清華大学蔵竹簡(注1)は当時における史伝の類が豊富に含まれており、戦国時代における歴史学の有り方についてを考察するに当たり、格好の材料であると言えよう。

その清華簡の中でも一風変わった史伝に関する文献が、第三分冊に収録される『良臣』である。これは、名臣の名をその君主ごとに配列して列挙するというものであり、論者は既に初歩的な報告をした(注2)。本論はその続稿として、清華簡『良臣』が『春秋左氏伝』（以下『左伝』）及び『国語』と特徴的な共通点を持つことを確認し、そこに見られる時代区分の意識を検討する。次いで『左伝』『国語』などに見られる予言についてを歴史学の立場より検討し、これが同じく『春秋』の伝とされ

る『公羊伝』『穀梁伝』とは異質な発想によっていることを論じ、更には『国語』の構成から戦国時代における歴史書の流布状況を検討する。これにより、『良臣』『左伝』『国語』といった楚地の歴史学と、『公羊伝』『穀梁伝』といった斉魯における春秋学との相違が浮かびあがってくるであろう。

一、清華簡『良臣』と『左伝』『国語』との比較検討

論者は前稿において、『良臣』の作者は晋から楚にやってきた一族に連なる、執筆当時は楚に属する人物であろうとした。こうした基礎作業を踏まえた上で、本節では『良臣』と『左伝』『国語』との共通点に注目していく。

先ず『良臣』の全文を掲げておこう(注3)。

黄帝之師、女和、黯人、保侗。
堯之相舜、
舜有禹、
禹有伯夷、有益、有史皇、有咎囚。
唐有伊尹、有伊陟、有臣扈。
武丁有傅説、有保衡。
文王有閎夭、有秦顛、有散宜生、有南宮适、有南宮夭、有芮伯、有伯适、有師尚父、有虢叔。
武王有君奭、有君陳、有君牙、有周公旦、有召公、遂佐成王。
晉文公有子犯、有子餘、有咎犯、後有叔向。
楚成王有令尹子文。
楚昭王有令尹子西、有司馬子期、有葉公子高。
齊桓公有龠夷吾、有賓須亡、有隰朋。
吳王光有伍子胥。
越王句踐有大夫種、有范蠡。
秦穆公有羖大夫。
宋有左師。
魯哀公有季孫、有孔丘。
鄭桓公與周之遺老史伯、宦仲、虢叔、杜伯、後出封。
鄭定公之相有子皮、有子產、有子大叔。
子產之師、王子伯願、肥仲、杜逝、斷斥。
子產之輔、子羽、子剌、蔑明、卑登、富之厦、王子百。
楚共王有伯州犁、以爲大宰。

『良臣』の内、春秋時代に相当する記述部分の特色としては、次の四点が見出せるであろう。

第一　晉の重視。文公が春秋諸侯の最初に配置されており、斉の桓公よりも重視されていること

第二　孔子を「孔丘」と諱で表記し、更に季孫氏が孔子よりも先に挙げられていること

第三　鄭の桓公と史伯とが特殊な形で登場すること

第四　鄭の子産が極めて重視されていること

これら四点について、『左伝』『国語』と比較していこう。

(1) 晉の重視

先ず第一点についてであるが、そもそも春秋諸侯の排列に意味があるのか、という疑問があるかも知れない。しかし、黄帝より周の武王・成王までは時代順に並べられている以上、春秋諸侯が法則もなく無規範に並べられたとは想定し難い。晉の次には楚が置かれており、晉・楚の後にようやく斉の桓公が登場するという配列からして、少なくとも斉桓公が覇者の筆頭であるとするような認識がされていなかったことは間違いない。つまり、孟子の言に始まり、現在の我々も霸者と聞いて即座に脳裏に浮かべる「斉桓、晉文」なる観念によっては、『良臣』は作成されていないのである。

ところで、この特色を『左伝』及び『春秋』経文と比較すると、『左伝』にも同様の傾向が存在することに気付く。『左伝』は晉の文公について手厚く記述するが、斉桓公に対しては冷淡であることが、既に鎌田正(注4)や野間文史(注5)によって指摘されている。今、野間の説明を藉り、これを掻い摘んで説明すれば、そもそも『春秋』経文は魯の歴史書であるから、魯の隣国である斉は『春秋』経文に隠公の時代から頻繁に登場する。一方、晉は魯から遠方であったため、経文に初めて登場するのは僖公二年まで下らなければならない。

しかし『左伝』では、晉は早くも隠公五年に登場し、曲沃と翼との本家・分家の争いや、驪姫の陰謀などが詳細に記述されていく。そして、いよいよ僖公二十三年、二十四年に重耳即ち晉文公の長大な放浪説話が語られる。ところが、この放浪説話には、伝文に対応した経文が存在しない。要するに『春秋』経文と関係なく、『左伝』が独自に晉の文公を手厚く記述しているわけである。

一方、『左伝』は斉桓公を冷淡に扱う。桓公の即位に

まつわる記述は、荘公八年、九年に見えるものの、これを『国語』斉語や『管子』、『史記』斉世家などに見える説話と比べてみると、『左伝』は非常に簡素である。また、斉桓公については、『春秋』経文には記述がありながら、『左伝』に対応する伝文が存在しないことも多く、『左伝』の斉桓公に対する関心は、晋文公に対するそれに比べて明らかに薄いのである。

晋文公を斉桓公よりも先に置く『良臣』は、晋文公を斉桓公よりも重視するという点において『左伝』と共通しているということが理解されよう。

(2) 孔子の軽視と季氏の重視と

次に第二点についてであるが、孔子を信奉する儒者が、孔子を「孔丘」と諱で呼ぶことは通常考え難い。新出土資料にも孔子の名を載せる文献はあるが、それらも孔子を「孔子」乃至「夫子」と呼称している(注6)。『孟子』にも「丘」の呼称はあるが、それは「孔子曰、其義則丘竊取之矣」というように、孔子の発言を引用したものなどに限られる。つまり、戦国儒家の文献が、地の文において「孔丘」という表記を用いることは、常識的に有り得ないのである。

よって、『公羊伝』や『穀梁伝』にも孔子は登場するが、そこでは経文も含めて孔子を諱「丘」で呼ぶことは全くない。経文に孔子の出生を述べる際にも、襄公二十一年「十有一月庚子孔子生（公羊伝）(注7)」「冬十月庚子孔子生（穀梁伝）(注8)」と表記するが、これが儒家の文献としては「常識的」なのである。

ところが『左伝』では、地の文において孔子を「孔丘」と記す例が散見される。

夏、公 齊侯に祝其に會す。實は夾谷なり。孔丘相く。犁彌 齊侯に言ひて曰く、「……」。齊侯之に從ふ。孔丘 公を以て退きて曰く、「……。」……。孔丘 茲無還をして揖して對へしめて曰く、「……。」齊侯 將に公を享せんとす。孔丘 梁丘據に謂ひて曰く、「……。」（夏、公會齊侯于祝其。實夾谷。孔丘相。犁彌言於齊侯曰「……。」齊侯從之。孔丘以公退曰「……。」……。孔丘使茲無還揖對曰、「……。」齊侯將享公。孔丘謂梁丘據曰、「……。」）（『左伝』定公十年(注9)）

甲午、齊の陳恆 其の君壬を舒州に弑す。孔丘三日齊して、而て齊を伐たんことを請ふこと三たびす。公曰く、「……」。……。孔子辭し、退きて而て人に

告げて曰く、「……」（甲午、齊陳恆弑其君壬于舒州。孔丘三日齊、而請伐齊三。公曰「……。」……。孔子辭、退而告人曰「……」）（『左伝』哀公十四年）

夏四月己丑、孔丘卒す。（夏四月己丑、孔丘卒。）（『左伝』哀公十六年）

これを『公羊伝』『穀梁伝』と比べれば、『左伝』の特異性が明瞭となる。『公羊伝』『穀梁伝』においては決して表記されることのない孔子の諱「丘」が、『左伝』においては地の文の中に利用されているのである。『公羊伝』『穀梁伝』が徹底して「孔丘」という表記を用いないことと比べれば、『左伝』は孔子に対する特異な立場を持っていると言えよう。

ところで、『良臣』で孔子と並記される季孫氏のイメージは一般に、魯において権勢を振るうが、能力や道徳性には問題があるというものであろう。次の『論語』における描写は、まさにその典型である。

齊人女樂を歸り、季桓子之を受け、三日朝せず。孔子行る。（齊人歸女樂、季桓子受之、三日不朝。孔子行。）（『論語』微子篇(注10)）

しかし、『左伝』には次のように季孫氏を高く評価する言説が見られる。

趙簡子 史墨に問ひて曰く、「季氏 其の君を出だして、而て民 焉に服し、諸侯 之に與し、君の外に死するも而も之を罪するもの或る莫きは、何ぞや」と。對へて曰く、「物の生ずるに兩有り、三有り、五有り、陪貳有り。故に天に三辰有り、地に五行有り、體に左右有り、各妃耦有り、王に公有り、諸侯に卿有り、皆貳有るなり。天 季氏を生じ、以て魯侯に貳とし、日たること久しきなり。民の焉に服するも、亦た宜ならずや。魯の君は世よ其の失を從にし、季氏は世よ其の勤めを修むれば、民 君を忘るるなり。外に死すと雖も、其れ誰か之を矜まん。社稷は常奉無く、君臣は常位無きこと、古自り以て然り。……（趙簡子問於史墨曰「季氏出其君、而民服焉、諸侯與之、君死於外而莫之或罪、何也。」對曰「物生有兩、有三、有五、有陪貳。故天有三辰、地有五行、體有左右、各有妃耦、王有公、諸侯有卿、皆有貳也。天生季氏、以貳魯侯、爲日久矣。民之服焉、不亦宜乎。魯君世從其失、季氏世修其勤、民忘君矣。雖死於外、其誰矜之。社稷無常奉、君臣無常

位、自古以然。……）（『左伝』昭公三十二年）

吉本道雅は、『左伝』が季孫氏に対して好意的な態度を取ることについて、『論語』において季孫氏が批判されていることと対照的であると指摘しているが[注11]、『良臣』においても「魯哀公有季孫、有孔丘。」として「季孫」が「孔丘」と併称され、加之「孔丘」よりも先に挙げられていることが注目されよう。

ところで、『良臣』において氏族名によって挙げられるのは、実は季孫氏のみであるが、『左伝』においても季孫氏歴代当主を単に「季孫」と表記する事が多い。そこで孔子生前の季孫氏にも目を向けると、三代目の季文子について『論語』と『国語』とが実に好対照な評価をしていることに気付く。

季文子三たび思ひて而る後に行ふ。子 之を聞きて曰く、「再びすれば、斯ち可なり」と。（季文子三思而後行。子聞之曰、再、斯可矣。）（『論語』公冶長篇）

『論語』では孔子によって小人扱いされる季文子であるが、『国語』では君子として描かれる。

季文子 宣成に相として、帛を衣るの妾無く、粟を食むの馬無し。仲孫它諫めて曰く、「子 魯の上卿爲りて、二君に相たるなり。妾は帛を衣ず、馬は粟を食まず、人其れ子を以て愛しむと爲し、且つ國を華にせざるか」と。文子曰く、「吾も亦た之を愿へり。然れども吾 國人を觀るに、其の父兄の粗を食ひて而て惡を衣る者、猶ほ多きなり、吾 是を以て敢へてせず。人の父兄は粗を食ひ惡を衣て、而て我 妾と馬とを美しくするは、乃ち人に相たる者に非ざる無からんや。且つ吾 德榮を以て國華と爲すを聞くも、妾と馬とを以てするを聞かず」と。文子以て孟獻子に告ぐ、獻子 之を囚ふること七日。是自り子服の妾、衣は七升の布に過ぎず、馬飼は稂莠に過ぎず。文子 之を聞きて曰く、「過ちて而て能く改むるは、民の上なり」と。上大夫と爲さしむ。（季文子相宣成、無衣帛之妾、無食粟之馬。仲孫它諫曰、「子爲魯上卿、相二君矣。妾不衣帛、馬不食粟、人其以子爲愛、且不華國乎。」文子曰、「吾亦愿之。然吾觀國人、其父兄之食粗而衣惡者、猶多矣、吾是以不敢。人之父兄食粗衣惡、而我美妾與馬、無乃非相人者乎。且吾聞以德榮爲國華、不聞以妾與馬。」文子以告孟獻子、獻子囚之七日。自是子服之妾、衣不過七升之

布、馬籩不過稂莠。文子聞之曰、「過而能改者、民之上也。」使爲上大夫。）（『国語』魯語上(注12)）

結局の所、季孫一族が小人であるかの如き印象は、儒家によって作り出され、これが後世に大きな影響を与えたことが了解されるだろう。季孫氏を孔子のライバルに位置付ける儒家以外にとっては、『左伝』における史墨の言に現れているように、魯国の舵取りをしている季孫氏は充分に優れた政治家として目に映っていたのである(注13)。

以上確認したように、『良臣』と『左伝』、『国語』とは、孔子を「孔丘」と記したり、季孫氏に好意的であるという特徴を共有している。

(3) 鄭桓公の重視

さて、第三点についてであるが、そもそも『良臣』が鄭の桓公と史伯らとをこれほどまでに大きく取り上げていること自体が、実に不可解である。鄭国の建国事情を述べるだけならば史伯に代表される西周の遺臣を並記する必要はなく、そもそも『良臣』が建国の由来を説明するのも鄭国についてのみである。

鄭桓公は周の幽王の子で平王や携王の弟にあたり、父王から諸侯として封ぜられたものの、内乱を予見して国都を東方へ遷した者である。鄭が春秋初期の大国となる礎を築いた人物とはいえるものの、鄭桓公自身には斉桓・晋文と並び称されるほどの華やかな業績はない。すると、『良臣』が鄭桓公や史伯らを高く評価するのは、西周の滅亡を予見し得たことによるのだろう。

ところで、『国語』鄭語はまさに鄭桓公と史伯との対話である。鄭語は『国語』において西周時代の末尾に位置し、その内容も周王朝の滅亡を予言するという、西周時代の終末を告げるものとなっている。つまり『国語』という史書は、鄭桓公と史伯とに、旧時代が終わり新時代へと移行することを語る役割を与えているのである。

従来は『国語』に何故鄭語が存在するのかという疑問が抱かれてきた。大野峻は鄭語について、その紀年が周のものであり、話の内容からしても周語の最後尾に位置すべきものであることから、周語からの錯簡としている(注14)。しかし『良臣』の出土により、西周の滅亡を鄭桓公によって示すという歴史記述の手法が、戦国時代に存在していたことが浮かび上がってきた。鄭語は周語からの錯簡ではなく、明確な意図をもって独立した一篇にされたと看做すべきであろう。

但し、鄭桓公を画期として重視する歴史観が当時の普遍的な通念であったとは、即座には言い難い。清華簡

『繫年(注15)』では、また異なった歴史観によって西周の滅亡が語られているからである。

繒人 乃ち西戎に降り、以て幽王を攻め、幽王及び伯盤は乃ち滅び、周 乃ち滅ぶ。邦君諸正 乃ち幽王の弟 余臣を虢に立つ、是れ攜の惠王なり。立ちて二十又一年、晉の文侯仇 乃ち惠王を虢に殺す。周の王亡きこと九年、邦君諸侯 焉に始めて周に朝せず。晉の文侯 乃ち平王を少鄂より逆へ、之を京師に立つ。三年にして乃ち東に徙り、成周に止まる。晉人 焉に始めて京師を啓き、鄭の武公も亦東方の諸侯を政す。武公 即世し、莊公 即位す。莊公 即世し、昭公 即位す。其の大夫 高之渠彌 昭公を殺して而て其の弟 子眉壽を立つ。齊の襄公 諸侯と首止に會し、子眉壽を殺し、高之渠彌を車轘し、改めて厲公を立つ。鄭 以て始めて正まる。楚の文王 以て漢陽を啓く。(繒人乃降西戎、以攻幽王、幽王及伯盤乃滅、周乃亡。邦君諸正乃立幽王之弟余臣于虢、是攜惠王。立二十又一年、晉文侯仇乃殺惠王于虢。周亡王九年、邦君諸侯焉始不朝于周。晉文侯乃逆平王于少鄂、立之于京師。三年乃東徙、止于成周。晉人焉始啓于京師、鄭武公亦政東方之諸侯。武公即世、莊公即位。莊公即世、昭公即位。其大夫高之渠彌殺昭公而立其弟子眉壽。齊襄公會諸侯于首止、殺子眉壽、車轘高之渠彌、改立厲公。鄭以始正。楚文王以啓于漢陽。)(『繫年』第二章)

『繫年』で語られる西周末から春秋初期の歴史に、鄭桓公は登場しない。代わりに晉の文侯と鄭の武公(桓公の子)とが時代を転換させた主役としての地位を与えられている。『繫年』は春秋初期に東方で覇を唱えた鄭武侯を重視するが、春秋時代の開始を予言しただけの鄭桓公には何らの注意も払わないのである。これは、諸国の歴史を軍事や外交を中心に記述するという『繫年』の性格を考えれば当然のことであり、『繫年』は極めて現実的な歴史書だといえよう。

このように戦国時代において、西周の滅亡を予言した鄭桓公と史伯とに注目するかしないか、という二系統の歴史の記述方法が存在していたことが、新出土資料によって明かになった。『良臣』と『国語』とは予言を重視する側に立って歴史記述をしているのである。

ところで、『良臣』における鄭桓公と史伯との挙げ方は、両者が君臣関係であったとは思えない形式である。そして、『国語』鄭語における「史伯」(『史記』鄭世家

では「太史伯」と鄭桓公との問答も、鄭桓公は鄭侯としてではなく周の司徒としての立場で史伯と問答しているように見える。つまり、問答の時点では史伯が鄭の臣であったとは言い切れないような書き方をしているのである。そうした舞台設定の中で、史伯によって西周の滅亡が必然であることが鄭桓公に告げられるのであるが、『史記』周本紀では幽王の時に「伯陽甫」「周太史伯陽」が西周の滅亡を予言しており、ここに鄭桓公は登場しない。『史記』の「周太史伯（伯陽甫）」と『国語』鄭語の「史伯」とは同系統の伝承と考えられるが、ともに「史伯」と鄭桓公とに君臣関係を設定しないという点で共通している。『良臣』が史伯を鄭桓公の臣下とせず、「周の遺老」として鄭桓公らとともに「後出封」したという特殊な記述をしているのも、そもそもの伝承で鄭桓公と史伯とを君臣関係においていなかったからであろう。

（4）子産の重視

さて、いよいよ最後の第四である。『良臣』は明らかに鄭の子産を重視しているが、『左伝』においても子産の発言は突出して多数が記録されている(注16)。これは『良臣』と『左伝』とを繋ぐ、大きな特徴と言って良いだろう。しかし、『良臣』において子産の師や輔として挙げられた人物には現在では知られないものも多い。このことは、『良臣』の作者が少なくとも子産周辺に関しては、現在の我々が見る『左伝』よりも情報量が多い資料を参照していたことを物語っている。つまり、『良臣』を『左伝』を見て書かれたなどとする、『左伝』からの派生作品であると考えることは難しいのである。

しかし、ここまで見てきたように、『良臣』と『左伝』、『国語』とを比較してみると、その特徴的な歴史の記述方法を共有していることが了解されるであろう。本論では四つの特徴的な点（1）晋の重視、（2）孔子の軽視と季氏の重視と、（3）鄭桓公の重視、（4）子産の重視、に注目してきたが、これらの何れか一つが共通しているという程度ならば、偶然の産物として済ませられよう。しかし、四点もの特徴的な記述方法が共通している以上、これは偶然などというものではなく、『良臣』と『左伝』『国語』とに強い関連性が存在すると想定するのが妥当である。『良臣』が『左伝』からスピンアウトしたものと考えることが難しいのであれば、『良臣』『左伝』『国語』とは、同一の素材を参照し、共通の歴史観によって別々に編纂されたものということになる。

二、楚地における歴史学

先程まで見てきたように、共通する歴史観を有する『良臣』、『左伝』、『国語』であるが、次にそこに見られる時代区分の意識について検討する。論者は前稿において、『良臣』の作者は楚地にいるであろうと推測したが、すると『良臣』には楚地において認識されていた歴史観が反映されていることが予想されるからである。

(1) 時代の画期としての三晋分立

戦国時代において、鄭桓公を西周滅亡を象徴する存在として取り扱う観念が存在していたことは、既に見てきた通りである。要するに『良臣』は鄭桓公によって一つの時代が始まったと認識しており、『国語』もまた時代の転換期の象徴として鄭桓公に注目していた。

ところで『良臣』に見える君主の中で最も新しい者は、魯哀公（～前四六七年）と越王句践（～前四六五年）とである。清華簡は炭素十四測定法によると西暦前三〇五±三〇年に書写されたと推定されており、『良臣』と同時に出土した清華簡『楚居』は楚の悼王（在位西暦前四〇一～前三八一）までを記載し(注17)、また『繫年』は西暦前四〇〇年前後の事件までを述べている。すると『良臣』は魯哀公の時期までで意図的に記述を終えていることになる。『楚居』や『繫年』が西暦前四〇〇年前後までを記録するのに対し、『良臣』が魯哀公の時代で記述を終えていることは、魯哀公や越王句践の時期を時代の画期とする意識の現れと考えられる。

(2) 春秋の攘夷説と楚王と

魯哀公で終わるということから、『良臣』が『春秋』経文に従って魯哀公で記述を終えたという可能性が、先ず考えられよう。楚においても何らかの「春秋学」が行われていたことは郭店楚簡『語叢一』からも明らかである(注18)。

> 易は、天道人道を會する所以なり。詩は、古今の志を會する所以なる者なり。春秋は、古今の事を會する所以なり。禮は、之に交はる行術なり。樂は、或いは生み或いは教ふる者なり。（易、所以會天道人道也。詩、所以會古今之志也者。春秋、所以會古今之事也。禮、交之行術也。樂、或生或教者也。）（郭店楚簡『語叢一』(注19)）

これらとほぼ同時期の儒家が『春秋』を孔子の著作として重視していたことは、『孟子』離婁下篇に見える。

孟子曰く、「王者の跡熄みて而て詩亡び、詩亡びて然る後に春秋作る。晉の乘、楚の檮杌、魯の春秋、一なり。其の事は則ち齊桓、晉文、其の文は則ち史。孔子曰く、『其義則ち丘竊かに之を取るなり。』と」と。（孟子曰、「王者之跡熄而詩亡、詩亡然後春秋作。晉之乘、楚之檮杌、魯之春秋、一也。其事則齊桓、晉文、其文則史。孔子曰『其義則丘竊取之矣。』」）（『孟子』離婁下(注20)）

ここで言われている「春秋」と、現在の我々が目にする『春秋』経文とが同一のものであるかを考える直接的な史料は存在しない。しかし野間が指摘するように、孟子の春秋に関する発言や孟子の思想と現在の『春秋』とが特に齟齬しないことから、基本的には同一のものであるとするのが妥当であろう(注21)。

すると、ここで或る疑問が生じる。『春秋』経文は楚王を「楚子」と貶記し、また「夷」として扱う。果たして楚の人間が、現在のような『春秋』を受容することがあったのだろうか。楚の国内で楚を貶める『春秋』学を講じることが許されたのであろうか。楚は王号を名乗り、『良臣』や『繫年』でも楚は王号で記述されている。戦国楚において春秋学というものが存在したとしても、それが現在の経文を前提とする、或いは現在の『公羊伝』のように華夷の別を重視する春秋学と同じものであったとは、到底考えられないのである。

ところが、『左伝』は楚を「夷」として扱わないことが、吉本によって指摘されている。「『公羊』『穀梁』が夷とする楚・秦を夷とすることが『左伝』に見えない」、「楚は、経文の段階では夷とされており……。それにも関らず、楚を夷と明言しないことは、経文に対する『左伝』の重大な変更というべきである」とは吉本の言である(注22)。

経文を敷衍説明する「春秋学」ではなく、経文を前提としない「左氏学」なるものがあったとするならば、そのような学問が楚で行われ、また発達を遂げて行ったとしても不思議ではないだろう。吉永慎二郎は『左伝』について「伝先経後」を主張し、先に見た郭店楚簡の『語叢一』における「春秋」は、理念的な孔子春秋というよりは歴史学的なものであると推定している(注23)。吉永の説くように伝文から経文が抽出されたのかどうかという問題は扨措こう。しかし、楚地においては『春秋』経文

を重視して華夷の別を論じるという、後の公羊伝などに連なってゆく斉魯の「春秋学」は受容されていなかったと考えるのが自然である以上、『春秋』経に依らずに発展した「左氏学」とでも呼ぶべき歴史学的「春秋」の存在が浮び上ってくるのである。

(3) 時代区分と三晋分立と

論ここに至って改めて考えなければならないことは、戦国時代において魯以外の国で、魯哀公を一つの時代の区切りとして意識することが有り得るのか、という問題である。孔子を信奉する儒者であれば十分にその可能性はあり、その場合は孔子の没年或いは孔子没時の魯公であった哀公の末年を以て、時代の区切りであると認識していたとも考え得る。しかし、そうした儒者が孔子を「孔丘」と諱で呼び捨てたり、孔子を季孫氏の下に排列することは想定し難い。もし『良臣』の作者が孔子を神聖視していたならば、孔子を哀公の臣下ではなく「師」として登場させていてもよさそうなものだが、『良臣』は孔子をそこまで特別に扱わず、むしろ季孫氏や子産を重視している。

ところで、『公羊伝』『穀梁伝』の経文は哀公十四年の西狩獲麒で終わっているが、『左伝』の経文は哀公十六年「夏四月己丑、孔丘卒。」まで続き、更に伝文だけが悼公四年の紀年まで続いた後、悼公十四年（杜注）における晋の智伯の滅亡という、三晋の分裂を決定づける事件によって記述を終える。その続伝も、哀公二十七年の後に悼公四年が唐突に記述され、悼公四年に始まる最後の記事も全て晋の智伯に纏わることであり、不自然極まりない構成となっている。

『左伝』が当初より『春秋』経文の釈義として作成されたのであれば、孔子卒するの記事、またはその君主である哀公に合わせて終わらせておけば、魯国史の『春秋』経に対する伝として、より自然であったろう。詰まる所、『左伝』は孔子や魯哀公ではなく、三晋の分立を時代の画期として重視しているのである。なお『国語』における最も時代を降る事件も「晋語九」の智伯滅亡であり、これが時代の画期として認識されていたことを物語っている。

斉の軽視や晋の重視、子産を始めとする鄭への傾倒、更には記述の対象とする時代範囲の齟齬など、もともと『左伝』は『春秋』経文の解説を目的に作成されたとは思えない。そして、この知伯滅亡、即ち三晋の分裂を画期とする史観は、『左伝』や『国語』の他に、やはり楚地と関係が深いとされる馬王堆『春秋事語』にも同様に

認められる。『春秋事語』において最も時代を降る記述はやはり智伯滅亡に纏わる事件であり、野間は「『事語』が後世のいわゆる春秋時代を一つの画期としていることは、この文献が『春秋』経文・伝文、特に『左伝』を前提としていることを意味するであろう。」と指摘している(注24)。

(4) 因果関係と春秋学と

この『春秋事語』と『左伝』、『国語』とには、ある共通の思考パターンを見出すことが出来る。それは、事件の予兆や予言などを重視することであり、大きく言えば因果関係を重視するということである。例えば『左伝』は、しばしば何年も後の事件のために予め伝することがあり、また多くの予言記事が認められる。時には占い、時には賢者の見識により、或る事象や行動がどのような結末を齎らすことになるかが予言され、そして実現した結果を記述する。このような予言を重視する『左伝』や『国語』は、あらゆる事件を「必然」の産物と捉え、歴史の展開を因果の絡み合いで把握しようとする歴史書なのである。これといった原因もなく偶然に発生したように見える事件についても何とかして原因を説明しようと努力した結果が、『左伝』の予言記事ということになる。

では、『春秋事語』では予言と因果とがどのように使われているのか、その例を次に挙げておこう。

齊の桓公、蔡夫人と與に舟に乘り、夫人舟を蕩す。之を禁ずれども、不可なれば、怒りて而て之を歸す。未だ之を絶たざるに、蔡人之を嫁がしむ。士説曰く、「蔡は其れ亡びんんか。夫れ女の制せられて夫に逆はざるは、天の道なり。大に事へて怒りに報ひざるは、小の利なり。説之を聞く、小邦の大邦に事ふるの道は、將□を亡はば則ち……。是の故に之を養ふに□好を以てし、之を申ぬるに子□を以てし、重るに……を以てし、……。今蔡の齊に女するや、爲□以爲此、今女の辭を聽きて而て之を嫁がしめ、以て齊を絶つ。是れ怨みを申ねて以て報ひるなり。……」と。桓公師を率ゐて以て蔡を侵し、蔡人遂に潰ゆ。(斉桓公與蔡夫人乘舟、夫人蕩舟。禁之、不可、怒而歸之。未之絶、蔡人嫁之。士説曰、「蔡其亡乎。夫女制不逆夫、天之道也。事大不報怒、小之利也。説之□、小邦□大邦之□、亡將□則□□□。是故養之以□好、申之以子□、重以□□□□□□□□□□□□□□。今蔡之女齊也、爲□以爲此、今聽女辭而嫁之、以絶齊。是□怨以□也。□□

□□□□悪角矣。而力□□□□□乎。」桓公率師以侵蔡、蔡人遂潰。）（『春秋事語』斉桓公與蔡夫人乗舟章(注25)）

波線部において、原因たる蔡婦人および蔡人の行動が語られ、二重波線部において桓公が蔡に侵攻し、之を潰したという結果が語られる。では、何故そのような結果へと必然的に帰結するのか、という原理を説明するのが、その間に挟まれている士説の発言である。

歴史を素材にするならば、因果関係を重視するのも当然ではないかと思うかもしれない。しかし、これを斉魯の地で発展していった歴史を利用した学問である公羊学と比較してみれば、傾向の違いが明瞭になる。そもそも公羊学とは、『春秋』経文の微言に着目し、登場人物の意志や言動が礼に適っているかを判断するものである。そこには歴史的・時間的な因果関係は考慮されず、結果すらも考慮されない。ただ恒常普遍の道徳を追求するのみであり、その時々の事件を静的に批評するのが斉魯の春秋学なのである。これと比較すれば、『左伝』『国語』『春秋事語』といった史書は、事件そのものの動機よりも、むしろ結果を生み出した原因を重視し、原因と結果とが複雑に且つ脈々と紡がれることによって歴史が作られると考えているようである。

ところで、公羊学の性質について日原利国は次のように説明している。

いったい行為の善悪を論定するとき、二つの見方が予想される。なぜそのような行為をなしたか、すなわち行為の動機や意図を追及する立場と、いかなる行為がなされたか、すなわち行為の事実や結果を主たる対象として判断する立場とである。これは道徳法則に対して行為の動機が合致すべきか、結果が合致すべきかの問題でもあり、動機論と結果論の対立となる。……。春秋（黒田注・公羊学を指す）は行為の結果を論ぜずして、行為の根底にひそむ意図を究明し、外的事実を閑却して内なる心情を偏重する、徹底した動機主義にたつ(注26)。

公羊学の動機主義に対峙される結果主義が、具体的にどのような学問であり書物であるかまで日原は語っていない。しかし、『左伝』『国語』『春秋事語』に見られる歴史事象を因果関係によって把握していく思考は、結果によって原因を評価するということであり、まさに結果主義の立場にある。今日の我々が目にする『左伝』『国

語』『春秋事語』はそうした歴史哲学の成果なのであり、楚の地において斯く発展したものと理解して良いだろう。

また、楚地では公羊学のような華夷の別を重視する春秋学が受容されたとは考え難く、吉永が郭店楚簡『語叢一』に見える「春秋」を歴史学的な学問であろうとしたことは既に述べたが、ここで『国語』楚語上に登場する「春秋」を思い浮かべると、楚地における歴史学が長い伝統を持っていたことが窺い知れる。そこでは荘王の時における太子の教育として「之に春秋を教へて、而て之が為に善を聳め悪を抑へて、以て其の心を戒勧せしむ」と言われている。楚荘王は春秋時代の人であり、ここで言う「春秋」は孔子春秋ではなく、歴史という意味になる。心を問題にしているのだから、これは公羊学のように動機主義に立つものではないかと思われるかもしれないが、結果主義もやはり心の訓誡に帰結する。歴史を因果関係によって説明し結果を重視するのは、善事を齎らす善行とは何か、悪事を生み出す悪行とは何かを考えることであり、それによって心を戒めていくからである。

(5) 楚における『左伝』の成立

なお、『左伝』が魯ではなく、楚の地で伝えられたとする説は、古くは劉向『別録』に見える。

左丘明は曾申に授け、申は吳起に授け、起は其の子の期に授け、期は楚人鐸椒に授く。鐸椒は『抄撮』八巻を作り、虞卿に授け、虞卿は『抄撮』九巻を作り、荀卿に授け、荀卿は張蒼に授く。(左丘明授曾申、申授吳起、起授其子期、期授楚人鐸椒。鐸椒作『抄撮』八巻、授虞卿、虞卿作『抄撮』九巻、授荀卿、荀卿授張蒼。)(『春秋左氏傳』春秋序正義引劉向『別録』)

姚鼐『左伝補注』序や章炳麟『春秋左伝読』、銭穆『先秦諸子繫年』六七「呉起伝左氏春秋攷　附鐸椒攷」はこれに注目し、近年では吉本が積極的にこの呉起伝承説を支持している。『韓非子』外儲説に「呉起、衛左氏中人也」とあり、呉起を「左氏」という地の出身とすることは興味深い。なお『韓非子』内儲説篇上七術や『戦国策』宋衛策に「衛嗣君」の領地として「左氏」が見える。

もっとも、『左伝』が『春秋』の伝である以上は中原に淵源するはずであるという前提に立ち、中原から楚へ移住した著名人を『左伝』の伝承者に附会するならば、

選択肢は呉起くらいしかないのだから、この系譜を単純に信じることも難しい。斯くして水掛け論になりかねない呉起伝承説であるが、しかし、少なくとも漢代の人士には、『左伝』は楚地で伝承されてきたとする説明が受容されていた。『公羊伝』『穀梁伝』という理念的な春秋学が伝承されてきたのは斉魯の地であり、『左伝』という歴史学的な春秋学は楚の地で行われていたとするのが、漢代における認識だったのである。

要するに、楚地においては荘王のころより一貫して歴史学が発展して行き、それが「原左伝」として結晶していったと考えられるのである。

(6) 『左伝』学の晋への流入

ただし、汲冢からは『左伝』の卜筮記事を纏めたという『師春』一篇も出土していることから、戦国魏（春秋時代の晋地）においても『左伝』に関する歴史学が行われていたことは確実である。楚地で発達した歴史学が戦国後期までには三晋の地に伝わっていたとする構図が描け、『左伝』が韓（鄭国を併合）を含めた晋楚の地域で共有され、更なる発展をしていったのだと思われる。

ところで、顧頡剛『春秋三伝及国語之綜合研究(注27)』では、『左伝』の原本として、晋史、楚史、そして列国史をもとに作られた原『左伝』である「原本左氏書」が想定されている(注28)。「原本左氏書」が晋や楚などの史書にもとづき『春秋』経とは無関係に製作されたのであれば、三晋の分裂が時代の転換期として意識されたことは当然であろう。このように理解してこそ、『左伝』が『春秋』経文の終了後も三晋の分裂まで続いていることが自然なものとして把握できる。『良臣』はその「原本左氏書」と資料及び歴史観を共有していると考えられる。

要するに、楚の地においては、三晋の分裂を時代の画期とする観念が存在しており、『良臣』の作者もそうした歴史観に従っていた結果、『繫年』や『楚居』と異なり三晋分裂後の人物を記述対象としていなかったのである。

三、今本『左伝』『国語』の編纂

ここまで、『左伝』のように因果関係を重視する歴史学が楚地で発展したものと考えてきた。最後に、歴史書であった原『左伝』が『春秋』経を釈義する『左伝』へと変わっていった経緯、また『国語』が不可解な編次を持つようになった経緯について考えておきたい。この問

題については古来より諸説が提示されており、決定的な結論は出し難い。しかし、現在の『左伝』や『国語』に対し、儒家イデオロギーの立場から手が加えられていることは、以下から窺える。

(1) 『左伝』の改変

『公羊伝』は華夷の別を重視して「呉楚の君に葬を書かざるは、其の号を辟くればなり」(『公羊伝』宣公十八年伝文)と言い、経文のみならず伝文においても楚王を「楚子」と貶記する。しかし実は、『公羊伝』の伝文は桓公二年と定公四年との二箇所で、地の文において「楚王」という表記を使ってしまっている。一方、『左伝』の伝文は、楚王の個別の王号や諡などはそのまま認め「楚武王侵隨」(『左伝』桓公六年)などと書いて平然としているが、実のところ「楚王」という表記は『左伝』の地の文では全く使われず、すべて「楚子」と表記される。『左伝』における「楚王」なる表現は、僖公二十二年、成公十六年、襄公二十六年、昭公元年、四年、五年、十一年、二十五年の八例あるが、これは全て会話文中の使用である。つまり、『左伝』では楚王の表記について、王個人の王号や諡は固有名詞として扱い、会話文は引用であるから「楚王」と表現するが、地の文では王号は決して用いず、例外なく「楚子」と呼称するという原則論が徹底されているのである。

しかし、古代の文献としては『公羊伝』の方がより自然であろう。例えば『論語』に重複した章がしばしば見受けられることからも明らかなように、大部の書物を編纂する時には、かならずエラーがつきまとう。むしろ例外無く統一されている『左伝』こそが、不自然なのである。これは『春秋』経文の釈義として『左伝』を再構成する際に、王号並びに五等爵の称に関しては徹底的に拘ったことを意味する。

ところで先程も見てきたように、『左伝』は地の文において「孔丘」と表記することがあり、『公羊伝』『穀梁伝』と比べて大きな特色となっていた。すると何故「孔丘」については徹底的に修正しなかったのかという疑問が出るだろう。実はこれが『左伝』に手を加えた時機と人物像とを推測するヒントになる。

先程も述べたように、戦国時代の儒者が地の文で孔子を「孔丘」と諱で書きあらわすことはあり得ない。ところが漢代に編纂された経書には、極稀ながら地の文に孔子を諱「孔丘」と表記するエラーが存在する(注29)。戦国時代の儒家の手になるならば、「孔丘」という表記は必ず「孔子」とされたはずである。

しかし、漢代に入ると孔子も歴史的存在に帰着し、戦国時代ほどの孔子信仰を所有しない儒者が登場してきたことは、孔子よりも周公を重視する古文学の登場からも理解されるだろう。こうした時代にかかる傾向を持つ人物が『春秋』経文の釈義として『左伝』を整える際、周公が定めたとされる社会秩序の五等爵には執拗に拘ったものの、「孔丘」という表記の「異常性」には然程意識しなかったと考えられるのである。すると、最終的に釈義の書として手を加えたのは劉歆であったと考えれば辻褄は合うが、しかし劉歆に特定する決定的根拠もないことから、ここでは時機について漢代であると推測するにとどめたい。

(2) 『国語』の改変

ところで『国語』の編次の中にも、儒家イデオロギーに基づく爵位への拘りが見受けられる。現在の『国語』の編次は、以下の通りである。

周　三篇　王　歴代
魯　二篇　侯　歴代
斉　一篇　侯　桓公一代
晋　九篇　侯　歴代
鄭　一篇　伯　桓公と史伯と
楚　二篇　子　歴代
呉　一篇　子　夫差一代
越　二篇　子　句践一代

斉語・呉語・越語が覇者の一代記であることは一見して明らかであろう。また「鄭語」は紀年や内容から見て明らかに周語の末尾に位置すべきものである(注30)。これが「鄭語」として独立させられた理由は、先ほども確認したように、鄭桓公（と史伯との予言）を西周時代と春秋時代との画期として重視した結果だと思われる。すると、『国語』に通史的な記載がされているのは周・魯・晋・楚のみということになる。

ところで、『晋書』束皙伝に汲冢より出土した文献について「『国語』三篇。楚・晋の事を言ふ。」とあるように、汲冢から『国語』の楚語、晋語に相当するものが出土したとされている。今本『国語』の晋語は九篇、楚語は二篇であるから、晋楚に関する一部分を得られたということであろうが、これは、魏地（もとの晋地）において、晋史と楚史とからなる「原本国語」とでも呼ぶべきものが流布していたことを窺わせる。

また、吉本は清華簡『繫年』に登場する国は非常に多

彩であるが、用いられている紀年は僅かに「周・晋・楚」の三国だけであり、その紀年の分布は『国語』と合致し、『繫年』の周と晋とに関する部分は『国語』と原資料を共有していると言う(注31)。浅野裕一も同様であり、浅野は『繫年』を周史と晋史と楚史とによって編集された歴史書であると見ている(注32)。魏の汲冢『国語』や清華簡『繫年』が晋史と楚史とを中心にしていることは当然のことと考えられようし、また、天子である周の歴史が参照されていることも、さほど違和感はない。

ところが、晋史と楚史とが重視されていたのは晋楚の地のみであったかというと、どうやらそうではない。東のかた斉においても流布していたらしきことが、先ほども見た孟子の発言から窺い知れる。「其の事は則ち斉桓・晋文」と言うからには、各国の史書の例として斉史と晋史とを挙げておけば良いものを、如何なることか孟子は「晋の乗・楚の檮杌・魯の春秋、一なり。」として晋史と楚史とを挙げるのである。斉にも歴史書が存在していたことは、『墨子』明鬼下篇が「周之春秋」「燕之春秋」「宋之春秋」とともに「斉之春秋」なるものを引用していることから明らかである。しかし、戦国中期において或る程度整理されて流布しており、知識人が議論の前提として共有していた体系的な史伝が晋史と楚史とのみであったという状況を想定してみれば、孟子の発言意図は非常に解りやすいものになる。

このように出土資料も活用していくと、戦国時代に知識人が見ていたであろう体系だった国史は、晋史と楚史と、そして周史とであった様子が見えて来るが、これは『国語』で歴代君主の事蹟を載せる国とも重なり合う。すると『国語』とは、周・晋・楚の国史から成り、鄭桓公を時代の分岐点として強調するために周語から鄭語を独立させたものが、もともとの構成であったと考えられる。そして楚によって魯が併呑され（西暦前二四九年）、魯の史料が流出したことで魯の歴代記録が増されたのだろう。但し、既に見てきたように「魯語下」では孔子が酷評する季文子を君子として描いており、この時点で儒者が主導的に手を加えていたとは考え難い。

その上で、更に五覇の概念によって斉・呉・越の覇者一代の記録を挿入すると、現在の我々が目にする『国語』の記載内容がそろう。そして最後に五等爵の概念で配列すると、一見すると法則性を見い出しがたい現在の『国語』の編次になり、鄭語が五覇の中に紛れ込んで奇怪なものとして目に映るのである。

こうした経緯を想定すれば、斉語と呉語、越語には所謂予言記事が存在せず、魯語にも比較的少ないという現

象が、説明可能となるだろう(注33)。

おわりに

以上、本論では先ず清華簡『良臣』と『左伝』『国語』との共通点を確認した。具体的には、斉を重視せず晋や楚を重視し、孔子を儒家のように神聖視せず、鄭桓公や子産を重視するといったことである。そしてこれらの史書は、西周から春秋への画期として鄭桓公を重視し、また春秋から戦国への画期として、魯哀公や孔子ではなく三晋の分裂を重視するという歴史観に基づいていることが明らかとなった。更に『左伝』『国語』や『春秋事語』の特色である予言記事とは、歴史を因果関係の展開によって把握しようとする結果主義に立つものであり、同じく歴史的事件を素材としながらも動機主義に立つ公羊学と好対照な歴史書であることを論じた。この因果関係を重視する歴史学は、斉魯で展開したとされる『公羊』『穀梁』の春秋学とは異質なもので、戦国楚において展開した歴史学の特徴だといえよう。

また、列国史のなかで楚史と晋史とのみが重視されていたということは『孟子』からも窺えるが、新出土資料によってこれを改めて裏付けることができた。これにより、一見すると奇怪な『国語』の編次も、もとは天子の国の歴史であるである周史と、そして楚史・晋史とからなっていたが、そこに魯史が加えられ、更に五覇の概念によって斉史・呉史・越史を増し、最後に爵位によって排列したという編纂過程を復原することが可能となり、合理的な説明が可能となったのである。

ところで従来の思想史においては、漢土における歴史哲学の創世紀を語ることには困難が存在した。これは、『左伝』や『国語』が戦国時代に遡ると考えた場合でも、漢代にどこまで手が加えられているかが俄に判然としないため、戦国時代において確実に存在していたと看做せる歴史観が抽出し難いためである。しかし、本論で取り上げた清華簡『良臣』のように、戦国時代に存在していた歴史観を窺わせる新出土資料によって、こうした限界を突破することが可能となった。これにより、戦国時代における歴史学や諸子百家と史との関係の解明が期待されるであろう。そこで、最後に今後の展望を兼ねて、儒家が本来は無関係であった「史」を呑込んでいった様子を簡単に説明しておきたい。

そもそも孔子『春秋』は儒家が経典として重視したものであるが、その存在や価値は、儒家が熱心に喧伝しなければ一般に承認されることはない。しかし、既に先行

して存在している類似物があれば、それとセットにして話題にすることで、先行物の権威をそのまま自己の称揚したい対象に取り込むことができる。そこで孟子は「晋の乗・楚の檮杌・魯の春秋、一なり。」と言い、孔子『春秋』を晋史・楚史と並び称することで、孔子『春秋』に対して歴史書としての権威をも付与していったのであろう。こうした手法を戦国時代の儒家が用いていたことは、例えば上博楚簡『君子為礼(注34)』において、子羽と子貢とが孔子を子産と比較し、孔子のより賢明なることを主張していたことなどを見れば明らかであろう。既存の権威と対比させ、自ら尊ぶ対象の優位を主張することが、戦国期における儒家の活動の一面なのである。戦国期における儒家と史との関係については、別稿において論じていきたい。

注

(1) 上海文芸出版集団、中西書局。一巻は西暦二〇一〇年、二巻は二〇一一年、三巻は二〇一二年、四巻は二〇一三年刊行。

(2) 黒田秀教「清華簡『良臣』初探」(『中国研究集刊號号』総第五十六号、平成二十五年)。

(3) 字句の校訂については前掲拙稿を参照。なお単純な文章であるため、訓読は省略した。

(4) 鎌田正『左伝の成立と其の展開』(大修館書店、昭和三十八年)第三章第二節。

(5) 野間文史『春秋左氏伝　その構成と基軸』(研文出版、平成二十二年)第三章、四章。

(6) 『上海博物館蔵戦国楚竹書(六)』の「孔子見季桓子」や、同(九)「史蔄問於夫子」など。

(7) 清嘉慶二十年重刊宋本影印『十三経注疏附校勘記』所収『春秋公羊伝注疏』(中文出版社、平成元年)を参照した。

(8) 清嘉慶二十年重刊宋本影印『十三経注疏附校勘記』所収『春秋穀梁伝注疏』(中文出版社、平成元年)を参照した。

(9) 清嘉慶二十年重刊宋本影印『十三経注疏附校勘記』所収『春秋左伝正義』(中文出版社、平成元年)を参照した。

(10) 清嘉慶二十年重刊宋本影印『十三経注疏附校勘記』所収『論語注疏』(中文出版社、平成元年)を参照した。

(11) 吉本道雅「左伝成書考」(『立命館東洋史学』二十五号、平成十四年)を参照。他に童書業『春秋左伝研究』(上海人民出版社、西暦一九八〇年)「仲子問題」「《左伝》尊季氏其他証拠」など。

(12) 『国語正義』(『《国語》研究文献輯刊』第三冊、第四冊、国家図書館出版社、西暦二〇一二年)を参照した。

(13) 『韓非子』外儲説右上にも、季孫氏が執政者として使者を遣

わし孔子をやり込める姿が描かれている。

(14) 大野峻『国語』上（新釈漢文体系六六、明治書院、昭和五〇年）の「国語解題」を参照。

(15) 前掲『清華大学蔵竹簡（二）』所収。

(16) 『左伝』の中における賢人の発言については、野間が既に調査を行っている。野間前掲書二二九頁を参照。それによると、子産が四五二二字、叔向が三〇四六字、晏嬰が一八二一字となっており、『良臣』では叔向も特殊な形で挙げられている。ところが晏嬰は挙げられておらず、こうした点からも晋の重視と斉の軽視が窺える。

(17) 『楚居』の概要については、浅野裕一「清華簡『楚居』初探」（『中国研究集刊崐号』総第五十三号、平成二十三年）などを参照。

(18) 同じく郭店楚簡『六徳』も『春秋』を含む六経の名称を並べる。

(19) 『楚地出土戦国簡冊［十四種］』（経済科学出版社、西暦二〇〇九年）を参照した。

(20) 焦循『孟子正義（十三経清人注疏）』（中華書局、西暦一九八七年）を参照した。

(21) 野間文史『春秋学　公羊伝と穀梁伝』（研文出版、平成十三年）四八頁。

(22) 吉本前掲「左伝成書考」。

(23) 吉永慎二郎『戦国思想史研究』（朋友書店、平成十六年）三四八頁。

(24) 野間文史『春秋事語』（馬王堆出土文献訳注叢書、東方書店、平成十九年）「三、韓魏章」。

(25) 字句の校訂及び解釈は、野間前掲書を参照した。

(26) 日原利国『春秋公羊伝の研究』（創文社、昭和五十一年）、一〇〇頁。

(27) 巴蜀書社、西暦一九八八年。

(28) 「四、《春秋》三《伝》論　二、論《左伝》」を参照。

(29) 例えば『礼記』檀弓上に「魯哀公誄孔丘曰、「天不遺耆老、莫相予位焉。嗚呼哀哉、尼父。」」とある。

(30) 大野前掲書「国語解題」。

(31) 吉本道雅「清華簡繫年考」（『京都大学文学部研究紀要』五十二号、平成二十五年）。

(32) 『出土文献から見た古史と儒家経典』（浅野裕一・小沢賢二、汲古書院、平成二十四年）所収の「史書としての清華簡『繫年』の性格」を参照。

(33) 『国語』における予言記事の登場頻度に偏りがあることは、大野が既に纏めている。大野前掲書十一頁を参照。

(34) 『上海博物館蔵戦国楚竹書（五）』（上海古籍出版社、西暦二〇〇五年）所収。